

日本統計学会会報

NO.119 / 2004. 4.25

発行—— 日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel: 03-3442-5501 Fax: 03-3442-5924
編集責任—国友直人（理事長）／南美穂子（庶務理事）
宿久 洋（広報理事）／太屋幸輔（広報理事）
振替口座—00190-2-61361
銀行口座—みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1. 巻頭随筆：「LTCM破綻事件 —火星人の到来だったのか—」松原 望... 1	国友直人... 7
2 シリーズ：統計学の現状と今後 「応用分野との協同のために何をすべきか」坂本 亘... 3	5 日本統計学会ロゴマークについて 8
3 2004年度統計関連連合学会宿泊関係等の 情報について早川 毅... 6	6 「第9回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集 8
4 中村隆英会員2004年度日本学士院賞受賞	7 修士論文・博士論文の紹介 9
	8 2002・2003年度第4回評議員会議事録12
	9 2002・2003年度理事会議事録14
	10 事務局から17

巻頭随筆

1 LTCM破綻事件—火星人の到来だったのか—

松原 望（上智大学）

去る1998年の「ロング・ターム・キャピタル・マネジメント」(Long Term Capital Management)の破綻は国際金融の歴史の中でも前例を見出しがたい世界最大級の金融破綻事件であり、扱いを誤れば世界経済を破滅の底にたたき込みかねない、いわばこの方面における「キューバ危機」であった。さいわい連邦準備委員会のグリーンズパン議長の大英断によって何千億ドルもの資金援助が関連金融機関に対して行われ、世界経済はカストロフの悲劇を見ずにすんだ。議長の当時の救済融資は正規の手続きを全うしていないといわれているが、かえって歴史に名を残す名議長といわれた。これも事態が切迫し急を告げていたことのあらわれであろう。

LTCMの破綻が学会の関心を引くとすれば、LTCMの「チーム」の中に2人のノーベル賞受賞者がいたことであろう。一人はコンピュータ・サイエンス出身の金融経済学者でスタンフォード大学教授マイロン・ショールズ、もう一人は数学出

身の経済学者でハーバード大学教授ロバート・マートンである。2人は1997年いわゆる「ブラック・ショールズの公式」で知られるデリバティブの価格付け理論によりノーベル経済学賞を受けている。事態に困惑したノーベル賞委員会のなかには、2人に対する受賞の撤回、ノーベル経済学賞自体の廃止の声さえ上がった。よく知られるとおり、ノーベル経済学賞は賞の創設時にはなく、現在も選考手続は外部委託されており、ノーベル賞委員会からみればこの事件は賞の権威を失墜させるものと考えられたのである。

事件や学者の毀誉褒貶のなかでも、これら理論内容の数学的真理自体がゆらぐことがないのはいうまでもない。ただ、2つの大きな問題は残るだろう。1つは学者の倫理問題がある。「チーム」のメンバーには、他にヒリブランド、ハガニなど多くの数学者も入っており、ショールズ、マートンだけが責任を問われるのではないことは公平の点から云っておこう。もう一つは、数学的真理の

社会的応用にかかわる、適切な内容関連性（レリバンシー）である。つまり、理論がそのまま現実でないのはもちろんであるとしても、「現実適用のための若干の手直しによって現実適用が十分可能」になる程度のものなのか、あるいは「数学的に真理だが（その価値はある）、理論上の仮定は社会的にはとうてい満たされず、社会的・歴史的前提にも合致しない、要するに社会とは別物である」のか。確率・統計にかかわる人間の一人として、関心を持たざるをえない問題なので、少々論じておこう。

まず、LTCMの概要は、出回っている解説本（極めて正確とはいいがたいが）および専門家の解説によれば次のようなものであろう。LTCMは、定量的アプローチを債券取引（アービトラージ＝価格差の裁定取引）に持ち込んだジョン・メリウェザーによって創設され、1993年から1998年9月28日まであらゆる点で「史上最高」揃いのファンドであった。史上最高の運用資金調達額（ピーク時には、銀行借入などによって1300億ドル＝約十数兆円の資金を動かしたといわれる）、「ドリームチーム」と呼ばれた社員構成、世界一流の顧客・人脈（各国中央銀行・民間金融機関）、史上最高利益そして史上最高の損失額である。LTCMの主要取引は、一貫して流動性が高い債券間のスプレッド（価格差）のボラティリティ（分散＝不確実性）が低い点に着目した「あらゆる債券」の「相対価値取引」で、レバレッジ（取引金額÷証拠金）は20～30倍、時にはそれ以上かけていた。その後M&A（1995）、金利スワップ（1996）、私募債・モーゲージ担保証券・株式（1997）と対象を広げ、より流動性が低く、より不確実性の高い市場へと参入する。その結果、LTCMは「破綻しやすい」構造を形成することになったのである。

LTCM破綻の要因はいくつか考えられるが、一般的な解説、関係者の話を総合すると、①大数の法則の市場適用、②過度の信用供与、③デリバティブ取引の監視体制の問題がまずはあげられよう。①の大数の法則の市場適用については、ブラック・ショールズのモデルに連続時間を持ち込ん

だマイロン・ショールズのファイナンス理論が基本である。その前提は、市場価格は対数正規分布にしたがう（正確には対数正規ブラウン運動＝幾何ブラウン運動となる）というものである。これは確率論としては中心極限定理（業界ではこれを「大数の法則」とよぶ通俗ミスが流布している）である。統計学者には正規性の検定などこれを検証するという帰納的態度があるが、自然科学者や数学者の間では、この正規分布はほとんど神話のような法則である。正規分布の元では日常から著しく外れた数値は「ほとんど火星人の到来のようなものである」。しかしながらそれは現実起こったのだが、かつてフランク・ナイト（Frank Knight, 1921）が「リスク」と「不確実性」を分け、リスクは想定された事象で確率がわかるもの（したがって保険が可能）、それに対し「不確実性」は想定範囲にも入っておらずその確率は測れない、というよりはそもそも「確率」自体成立しない（いわば、本物の不確実性）と述べた古典法則が思い出される。その意味で、ケインズが賢くも確率論の古典Treatise on Probability（1927）で展開した確率思想、つまり数値としての確率概念は不可能で、確率概念は半順序としてのみ可能としたことを思い出す。社会的事態に確率を扱うには重要な見地である。

ナイトにせよ、ケインズにせよ賢人の知恵のようなものだが、今日の確率論や意思決定のテキストからはこの「リスク」と「不確実性」の分別は消えている。Luce, RaiffaのGames and Decisions（1957）を最後に以降は見えていない。また、出版後80年も経つのにケインズのTreatise on Probabilityはケインズ全集の中でも邦訳されていない。世界的に見ても、Treatise on Probabilityに対する引用や言及は少ない。だから、LTCMの人々は、1929年の大恐慌から学ぶことがなく、ソ連の崩壊のような想定外の事件は計算に入れてなかったのである。数理科学者が先輩の賢人の知恵や歴史に対しいさ少し謙虚であったなら、モデルは社会的によりよく適合したであろうに。

ロバート・K・マートンの父は有名な社会学者

ロバート・C・マートンで、有名な「予言の自己成就」Self-fulfilling of Prophecy (1928) の考え方で知られる。社会には「〇〇となるだろう」という誤った言明が真に〇〇を引き起こすメカニズムがあるという。マートンの例は人種差別と銀行取り付け－「倒産する」という風評だけで倒産を引き起こす－であった。LTCM破綻が「予言の自己成就」であったかどうかは正確には定かでないが、メカニズムは共通だろう。マートン親子の間で、子が親に学ばなかったと同時に、LTCMの確率論のスマートな人々は、社会的にこれほど知られたことさえ、念頭に浮かばなかったのは残念である。ある経済学者は私に、「松原さん、LTCM破綻はベイジアンだったら避けられた？」と尋ねたが、たしかに外部情報が人々の認識を変更するというベイジアン・モデルなら、少なくともLTCMの「チーム」の人々を謙虚にしたと思う。もっとも身近な教訓としては、確率・統計分野の研究者は

もっと学際的態度を身につけるべきであろう。

ここではのべないが、学者の社会関与に多大な金銭的利益が関係するときの倫理の問題がある。医（薬）学者が医薬を發明したとき、工学者が極めて高価値なデバイスを開発したとき、確率・統計の公式が多大な経済的価値を生み出すときなど、倫理はいかにあるべきか。学者の金銭上のモラルは、平均人以下ではないにせよ、以上でもないであろう。利用の許可ならとにかく、LTCMのように自ら会社を興しての利用ならば社会的責任は免れないというところがおおかたの線であろうか。上記（②過度の信用供与）の原因のように、LTCMが銀行から過度の与信を受けたとき、学者の社会的名声が多大な効を奏したという。

* LTCM破綻の学問的分析については、<http://www.qmss.jp/prob/finance/6-finance.htm> を参照のこと。

2 シリーズ：統計学の現状と今後

応用分野との協同のために何をすべきか

坂本 亘（大阪大学）

（1）はじめに

今年の4月に私の所属する統計数理講座の教授に着任された狩野裕先生が前号の会報の本連載に寄稿しておられた。その主旨は「理論研究を主にしつつも実際の応用現場との接点をもつことが必要である」というもので、私も同感であるとともに耳の痛い内容であった。

では私たち統計科学の研究者は今後何をすべきか。本連載への寄稿を依頼され、狩野先生への返答のつもりで本稿をまとめているうち、最近読んで解剖学者の養老孟司氏の著書『養老孟司の＜逆さメガネ＞』（PHP新書）を思い出した。同書の内容は、社会全体が悪い方向に傾いていても社会の中にいるとそのことに気づかぬまま思い込みで陥る、そこで「逆さメガネ」をかけて物事を違う方向から眺めてみることも必要である、というも

のである。もちろん私は養老氏のような鋭い感覚をもちあわせていないが、統計科学の現状を「逆さメガネ」で眺めてみると問題点と打開策が見えてくるのではないかと考えた。本稿を通じて私たちに出来ることは何かを考えてみたい。

（2）現象に基づく統計科学の発想

私はノンパラメトリック回帰の方法論の研究を続けている。自身が提案する手法の性能を確かめるために、シミュレーションに加えデータへの適用を試みるのだが、どうしても手近にある文献例のデータに頼らざるをえない。しかも研究対象のモデルに合ったデータは意外と見つかるのに苦労するし、すでに他の解析方法でよい結果が出ていることもしばしばである。

今年の3月に阪大を定年退官された後藤昌司先生は主宰しておられる「医学統計研究会」の会合などを通じて私を大変器用にしてくださった。企業でのデータ解析や臨床試験の過程など貴重な話題を得ることができ、社会人の博士課程の方々

も共同研究をさせていただいた。その後藤先生でさえ、製薬企業でのデータ解析の経験が大変に豊富であるにもかかわらず、大学には「活きたデータ」が全く無い、と最近の論文に書いておられた。後藤先生は日頃から、現実のデータを見つけるには大学の中に閉じこもってはいは駄目で、応用分野との人的交流が不可欠であり、そのためには周囲に仲間（応援団）を作ることが近道である、とおっしゃっていた。

さて、現実のデータに対してどのように接近するのか。統計数理研究所・名誉教授の赤池弘次先生は、今年2月の大分統計談話会・第29回大会での特別講演の中で、「モデル構築の仕事成し遂げるには対象への鋭い感覚（sense）が必要である」と述べられ、現象を知ることの重要性を説かれた。「統計的モデル構築はスプラインのような平滑化の段階を超えて、構造的モデル構築の方へと進めていかなければならない」とも述べられ、平滑化スプラインを研究対象としている私には衝撃的な内容であった。また、後藤先生の恩師である故・北川敏男先生が著書の中で述べられた言葉「データ解析は統計学の教科書の最初の部分で説明されるが、実は統計理論の全般を学んだ後にはじめて可能になる。」はとても印象深い。

理学部出身（主として数学を専攻）の私をはじめ、日本での数理統計の研究者の多くは、開発した統計理論や方法論を出発点としてデータへの適用を行うことが多いと思われる。その結果、用いるデータは使い古されたものや適用結果の良いものに限定され、研究成果に説得力が生まれてこないことがある。数学の発想は演繹的推論に基づくのに対して、統計科学の発想は帰納的推論に基づくといわれるが、私たちはどうしても演繹的推論に基づく発想の枠を越えられずにいるのではないか。そこで「逆さメガネ」をかけて、これまでとは逆の順序での発想、つまり帰納的推論に基づく発想へと転換してみることが必要ではないだろうか。研究対象の方法論に基づいてデータを採るのではなく、関心のある応用分野を見つけ、そこから得られるデータに対してその現象の背後にある

構造を考慮しながらモデルを構築する、これが統計科学の理想的なあり方ではないだろうか。

(3)「情報学」の中の統計科学

科学研究費補助金の申請時に書く分科・細目について、「統計科学」が「情報学」分科の下細目内に含まれることになった。統計科学が「分科」から「細目」に1段階下がったという点では確かに残念なことかもしれない。しかし「逆さメガネ」をかけて考えてみれば、統計科学が孤立した学界にいたわけではなく、情報学と深く関わっていることが認められたわけで、私は統計科学が情報学をはじめとする応用分野との関わりを深めていく契機と捉えたい。

私の所属する数理教室では大学院教育とともに基礎工学部・情報科学科・数理科学コースへの教育も行っている。情報科学科には数理科学コースのほかに情報系2コース（ソフトウェア科学、計算機科学）があり、2年生への進級時に学生の希望と1年次の成績をもとに各コースに振り分けられる。1年生の時点では教科のイメージが先行するためか、ソフトウェアの人气が圧倒的に高く、逆に数理に対しては拒絶反応を示す学生が多い。結局1年で数学の単位を落とした学生が第3希望の数理に入ってくるという皮肉な結果が生まれる。ところが蓋を開けてみると、数理に入ってから伸びる学生や、情報ではなく数理に来てよかったという学生も多い。また最近では就職の求人も情報ではなく数理の学生が求められたりすることがあり、数理や統計科学に対する社会の要請が高まっていることを実感する。

他の応用分野と関わっていくにあたり私たちが備えておくべきことは、他の応用分野の研究者をはじめ学生や世間一般の人々に統計科学のことをわかりやすく説明できるようにしておくことであると考え。私は所属する大学院の方針で英語による講義を担当する機会があるが、専門分野について（英語で）説明するとき、その難しさを痛感する。ちなみに統計学（statistics）をOXFORD現代英英辞典（第6版）で引くと、

1. a collection of information shown in numbers. : 数

量で表される情報の集まり（統計値）

2. the science of collecting and analysing statistics. : 統計値を収集し解析する科学

とあり、統計科学は情報学の基幹をなすものであることが示唆されている。

(4) 学会の連合について

日本には統計学会のほかにも統計関連の学会がいくつかあり、私はそのうちの一つの学会で理事を担当させていただいている。現在、統計関連の学会を一つにまとめようという趣旨で、統計関連学会の連合の動きが進みつつある。統計科学の現在の危機的状況を考えれば、対外的な窓口の必要性、欧文誌のインパクト・ファクターによる評価の上昇、学会事務の効率化などの点で、統計関連学会の連合組織を作ることには意義がある。

ただし、確かに統計関連の学会が互いに力を合わせるというのも重要であるが、それだけではかえって統計学界が殻に閉じこもってしまうのではと危惧する。「逆さメガネ」をかけて考えると、統計科学が応用分野と接点をもちつづけるためには、むしろ各学会に個性をもたせることも必要ではないかということに気付く。各学会が得意とする分野で応用領域との接点を持ち、その方向に門戸を広げていくことで、統計科学がもっと世間に認知されるのではないかな。

私のような若手が発言すべきことではないかもしれないが、会員の1人として反論を恐れず申し上げたい。統計学会をはじめとする3学会が主催してここ数年開催している連合大会のやり方は、それまでの統計学会の講演報告会を拡大したに過ぎず、各学会の個性が消えてしまっていると感じる。果たして何のための連合なのか疑問である。大きい学会がなし崩し的に他の学会を取り込むようなやり方は、統計学界を自らの殻の中に閉じ込める結果に陥らせるものである。連合の構想を成功裡に進めていくためには、各学会の意見が対等に集約・反映されることを強く望む。

(5) 結びに代えて：『ネイチャー』を読もう

本稿を締めくくる前に一つの具体的な提案をしたい。これは『『ネイチャー』を英語で読みこな

す』（講談社ブルーバックス）を読んで、私も最近試していることである。

『ネイチャー』と言えば、自然科学全般を対象とする学術雑誌の最高峰であり、インパクト・ファクターが高いことでも有名である。ネイチャー・ジャパンのウェブサイトにてユーザ登録しアクセスしてみると、統計科学に関係のある記事・論文が毎週1～2本ほど見つかる。しかも驚くことに、著者は統計学者でない各分野の研究者であるにもかかわらず、高度な統計解析の手法が使われていたり、論文の題名に統計用語が出てきたりする。以下、今年の発行分から題名を抜粋した。

- ・「感覚運動学習におけるベイズ予測」（1月15日号）
- ・「欧州の夏季の熱波に気温のばらつきの増加が果たす役割」（1月22日号）
- ・「遺伝子ネットワークのノイズの集約」（1月29日号）

これらの論文を読んで気付くことは、諸外国では応用分野の研究者が統計科学などの基礎分野の研究者といかに深く交流しているかということであり、日本の現状とは大きな差を感じる。読者の皆さんも応用分野への関心を惹き起こすための教材として『ネイチャー』を利用してみてはいかがであらう。

近年、理科離れや大学教員の就職難などを背景として、基礎研究に魅力を感じて博士課程に進学する学生が少なくなっており、私は次の世代の研究者が育たないことを大変に憂慮している。私たちは産学協同での研究や学生・社会人への教育などを通じて、統計科学が魅力のある学問であることをもっと訴えかけていくべきである。そのためには私たちが「逆さメガネ」をかけてこれまでの見方を変え、応用分野への関心をもつよう常に心掛けることが重要ではないだろうか。

末筆ながら、本稿執筆の機会を与えていただいた、宿久洋広報担当理事をはじめ編集委員会の皆様に感謝したい。

3 2004年度統計関連連合学会宿泊関係等の情報について

連合大会実行委員会委員長

早川 毅（富士大学）

本年度の統計関係連合大会は岩手県花巻市の富士大学で9月3日（金）から6日（月）まで開催されます。大学の場所及び宿泊地の位置関係については連合大会の広報Web（<http://www.ajss.gr.jp>）を参照して頂きたいです。大学周辺の宿泊地と大学との交通に関する簡単な情報を述べたいと思います。宿泊予約関係については上記Webに掲載されている「カワトクトラベル」のホームページより予約をすることが出来ます。

花巻へは新幹線北上駅、新幹線新花巻駅、花巻空港（福岡、大阪、名古屋、札幌）より来ることが出来ます。大学へは新幹線北上駅より岩手県交通バス「石鳥谷」、「紫波」、「花巻温泉」、「花巻空港」、「花巻駅」行きにより富士大学前下車（タクシーを利用する場合には約3000円）。新花巻駅からは直接に大学へ来るバスはなく、釜石線または岩手県交通バスにて花巻駅へ行き、岩手県交通バス「北上駅」行きにて富士大学前下車（タクシーを使用する場合には約3000円）。花巻空港からは岩手県交通バス「北上駅」行きにて富士大学前下車、片道530円（タクシーを使用する場合には約3000円）。

宿泊地区については基本的に3カ所、北上地区、花巻温泉地区、花巻地区が挙げられます。また南花巻温泉郷（花巻温泉地区とは距離的に離れているが名湯が多い）が在ります。ここでは上記3箇所の特徴を述べさせていただくが、南花巻温泉郷については「カワトクトラベル」のホームページを参照してください。

- (1) 北上地区：北上駅周辺には多くのビジネスホテルが在ります。大学へは北上駅より岩手県交通バスにより富士大学前まで25分程度、料金は片道490円です。バス停から大学まで徒歩5分です。時刻表は「カワトクトラベル」

のホームページを参照ください。また、朝夕に短時間に多くの会員を輸送するために臨時バス（有料）を配車する予定でいます。東京方面からの方は新幹線北上駅で下車し西側方面に出て頂きます。定時発のバスとの連絡時間は7、8分程度しか在りません。北上地区には多くの飲食店が在りますので郷土料理等を楽しめます。北上川の対岸には桜の名所「展勝地」があり、北上夜曲の歌碑があります。また、秘湯「夏油温泉」も近く疲れを癒すことが出来るでしょう。

- (2) 花巻温泉地区：花巻温泉地区から大学まではホテルのバスにより無料バスを運行します。なお、土曜日、日曜日はホテルの都合により朝方と夕方に配車を行うので予定時間帯の利用をお願いします。それ以外の場合には、花巻温泉—花巻駅—大学前のバスを利用する必要があります。料金は570円、しかし1日に5本程度しかありません（バス時刻表を参照）。新幹線で新花巻駅へ来られ花巻温泉地区へ直接行く場合にはホテルの送迎バスが利用できます。
- (3) 花巻地区：新花巻駅より釜石線を利用するか岩手県交通バスにて花巻駅（東北本線）へ来る。花巻駅周辺にはホテルは数件しか在りません。大学へは花巻駅より岩手県交通バスにより15分程、片道290円です（バス時刻表参照）。臨時バス（有料）を配車する予定ですが北上に比べて少なくなるでしょう。花巻駅近くにある銀河鉄道壁画（19時30分より見ることが出来る）は一見の価値があります。花巻駅周辺から宮沢賢治、高村光太郎、新渡戸稲造関係の記念館へのアクセスは便利です。また花巻市内での郷土料理を楽しむこと

が出来ます。また柳田国男「遠野物語」の遠野までは車で1時間弱です。

- * レンタカー：北上駅、新花巻駅にてレンタカー（トレンタク）をグループで利用されると行動の自由の点から便利です。多くの観光地が分散していますので観光のためにも良いでしょう。大学には十分な駐車スペースがあります。レンタカーは多くの利用が予想されますので増車を依頼していますが事前に予約をされることをお勧めします。予約は「カワトクトラベル」で行えるようにしてあります。
- * 観光：観光バスによるツアーは「カワトクトラベル」のホームページに各種コースが提示してありますのでご利用ください。

「大会期間中の学内施設利用環境」

- (1) 大学内には都市銀行のATMは設置して在り

ませんが、地方銀行の岩手銀行、東北銀行、東日本銀行のATMが在り都市銀行との連携はあります。なお、大会期間が土曜日、日曜日に懸かりますのでこの期間は銀行のATMは利用できません。

- (2) 昼食に関して学内の食堂の施設が手狭な為に短時間時多くの方の給食をすることが出来ません。その為ある一定量の弁当を予約制として販売する予定です。大学内の売店においてパン、サンドイッチ類、おにぎりを販売しています。大学の近くには2、3軒の食堂がありますが徒歩で10分から15分程かかります。
- (3) 保育室は保育委員により準備され、花巻地区のボランティア団体によって行われますのでご利用ください。
- (4) 富士大学の温泉プール（25M）を利用することが出来ます。健康維持のために学内の運動施設を利用することが出来ます。

4 中村隆英会員2004年度日本学士院賞受賞

日本統計学会理事長
国友 直人（東京大学）

2004年3月12日、日本学士院（The Japan Academy）は優れた学術研究を対象とする日本学士院賞を、統計学会会員の中村隆英氏（専攻：統計学・経済学）による著書“A History of Showa Japan 1926-1989（University of Tokyo Press 1998年）”に対して授与することを決定した。同書は同氏による「昭和史Ⅰ・Ⅱ（東洋経済新報社1992年）」の英訳であるが、最近の動向についても注などで増補した書物になっている。昭和期における経済と政治の相互連関を重視し、実証的な視点から述べた昭和期の歴史を国際的に発信したことが評価につながったようである。

中村隆英会員はこれまで経済史分野や日本経済の統計的分析などを研究の中心として、数多くの著書を刊行してきている。近年の経済史研究や日本経済の実証分析では統計学的手法が日常的に使

われるようになっているが、こうした統計的分析にもとづく実証的研究を重視する研究方向を形成する上で、中村教授は先駆けとして関係者の間では高く評価されてきている。日本統計学会においても長年活躍されているが、特に1987年1月～1988年12月には日本統計学会会長として統計学会の運営に寄与されている。さらに、総務庁の諮問機関である統計審議会の会長としても活躍され、日本の官庁統計の整備にも多大の寄与をされている。

中村隆英会員の受賞にあたって、経済史や日本経済の実証分析などの研究における統計学的分析の重要性が再認識されたことは、同氏の業績が評価されたこととともに統計学関係者にとり喜ばしいことである。

5 日本統計学会ロゴマークについて

日本統計学会では、学会のロゴマークを募集致しましたが、厳正なる審査の結果、最優秀賞として、埼玉県在住の竹内麻代さんの作品に決定しましたのでお知らせいたします。また、専門家の補作により右記のマークが日本統計学会ロゴマークとなりましたのでご報告いたします。このロゴマークは日本統計学会の会誌、封筒、レターヘッドなどに使われる予定です。



6 「第9回日本統計学会賞」受賞候補者の推薦募集

第9回日本統計学会賞受賞候補者の推薦募集を下記の選考方法にしたがって行います。書式については、学会事務局にお問い合わせください。第9回受賞候補者の推薦締め切りは2004年6月7日(月)です。推薦書の宛先は学会事務局です。

【推薦方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

受賞の候補者を推薦することができる者は、日本統計学会の正会員、名誉会員に限る。推薦者は所定の書式にしたがって、対象範囲に定められた分野のいずれかに候補者を推薦する。

なお、賞の概要を以下にご紹介します。

【名称】日本統計学会賞

【趣旨】統計学の研究及び普及に対して貢献した個人に対して授与し、その功績を顕彰する。

【対象範囲】受賞の対象となる者は、その年齢、性別、国籍、日本統計学会の会員・非会員の別を問わない。また、対象とする分野は次のとおりとし、全体として年間3名程度に授与する。

- ・理論統計学の理論の発展に多大な貢献のあった者。
- ・実証・応用・計算；この分野は以下のような内容を含む。

- (1) 人文・社会系では、経済、経営の実証分析、社会学、言語学、心理学の調査・分析など、統計的手法を利用して社会的現象を解明する

のに貢献のあった者。

- (2) 医学、工学、農学、理学などでは統計的手法の適用による具体的な問題の解決に対する貢献のあった者。
- (3) 統計計算では、統計的分析のためのアルゴリズム・ソフトウェアの開発に貢献のあった者。
- (4) 応用一般として、分野を問わず統計調査の標本設計、経営管理などで貢献のあった者。その他：理論・実証・応用などを含め、幅広く統計学の普及・発展に貢献した者。

【選考方法】受賞対象者の選考は、会員の推薦を受けて、選考委員会が実施する。

- (1) 略(上記推薦方法を参照)

- (2) 選考委員の任期を1年とし、その委員会の構成は以下の通りとする。

- ・日本統計学会会長、前会長、理事長、会誌編集担当理事2名、および会長が推薦し評議員会が承認した者若干名、
- ・選考委員会委員長は、日本統計学会会長が務める。

【賞の内容】賞状および記念品などの副賞を授与する。副賞は、原則として「統計学の学会活動60周年記念基金」の果実の範囲とする。

【発表】選考委員会は、その結果を評議員会および学会総会において報告し、大会期間中に授賞式を行う。

7 修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文の紹介を、(1) 氏名, (2) 学位, (3) 取得大学, (4) 論文タイトル, (5) 主査・指導教官等, の順で記載します。

修士論文

- [1] (1) 弘新太郎 (2) 修士 (工学) (3) 北海道大学 (4) 相対射影追跡法における射影指標に関する研究 (5) 主査 水田正弘
- [2] (1) 佐藤祐介 (2) 修士 (工学) (3) 北海道大学 (4) テキストマイニングを用いた電子メールの特徴解析とその応用 (5) 主査 水田正弘
- [3] (1) 島村徹平 (2) 修士 (工学) (3) 北海道大学 (4) 動径基底関数ネットワーク非線形回帰モデルにおけるLASSO型推定量に関する研究 (5) 主査 水田正弘
- [4] (1) 清水淳史 (2) 修士 (理学) (3) 筑波大学 (4) Confidence intervals for a positive parameter (5) 主査 赤平昌文
- [5] (1) 山本泰志 (2) 修士 (理学) (3) 筑波大学 (4) On the amount of information contained in record data (5) 主査 赤平昌文
- [6] (1) 赤司健太郎 (2) 修士 (経済学) (3) 東京大学 (4) 質的選択パネルモデルの倒産分析への応用 (5) 主査 国友直人
- [7] (1) 大和田孝 (2) 修士 (経済学) (3) 東京大学 (4) 経験尤度法による安定分布のパラメータ推定 (5) 主査 国友直人
- [8] (1) 浦崎賢太郎 (2) 修士 (農学) (3) 東京大学 (4) 腸炎ビブリオの確率的リスク解析 (5) 主査 岸野洋久
- [9] (1) 梶谷泰秀 (2) 修士 (農学) (3) 東京大学 (4) 微生物ゲノムの系統プロファイルとマクロ進化モデルに関する研究 (5) 主査 岸野洋久
- [10] (1) 永宗仁美 (2) 修士 (農学) (3) 東京大学 (4) ハマダラカ集団解析における多型マーカーの利用とサンプリング方式 (5) 主査

岸野洋久

- [11] (1) 宮口聡明 (2) 修士 (農学) (3) 東京大学 (4) 不完全データの父性解析と遺伝子流動の推定 (5) 主査 岸野洋久
- [12] (1) 伊藤隆洋 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) 臨床試験の中間解析結果に基づく被験者数再設定方法の検討 (5) 指導教官 大橋靖雄
- [13] (1) 相田麗 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) 日本人中高年におけるdietary patternと循環器疾患リスクファクターの関連 (5) 指導教官 大橋靖雄
- [14] (1) 土居主尚 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) Analysis of HRQOL Data with Death and Drop-out in Advanced Non-Small-Cell Lung Cancer Patients (5) 指導教官 大橋靖雄
- [15] (1) 石井苗子 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) 疫学調査を行う対象地域の住民への教育的介入が与える影響 (5) 指導教官 大橋靖雄
- [16] (1) 平山朋 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) 疫学調査における拡張プロペンシテイスコアを応用した地域間格差の解析 (5) 指導教官 大橋靖雄
- [17] (1) 谷口隆司 (2) 修士 (保健学) (3) 東京大学 (4) 多施設共同臨床試験における施設間差を考慮に入れた症例収集期間再推定 (5) 指導教官 大橋靖雄
- [18] (1) 菊地淳 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) On Multiple Comparisons of Mean Components in the Intraclass Correlation Model with Missing Data (5) 主査 瀬尾隆
- [19] (1) 三浦徳仁 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Asymptotic Expansions for Distributions of Test Statistics for Profile Analysis in Elliptical Populations (5) 主査 瀬尾隆

- [20] (1) 西銘真紀子 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Kendall's tau-b type measure of association between difference and sum variables for square contingency tables: application to unaided vision data (5) 主査 富澤貞男
- [21] (1) 田畑耕治 (2) 修士 (理学) (3) 東京理科大学 (4) Measure of departure from quasi-symmetry and Bradley-Terry models for square contingency tables with nominal categories (5) 主査 富澤貞男
- [22] (1) 叶健 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 主要評価変数が2つある検証的臨床試験における症例数設計 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [23] (1) 菊池かずよ (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 投与計画に制約のある臨床薬理試験の最適計画の検討 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [24] (1) 斎藤有希 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 精神症状評価の信頼性試験における被験者数と評価者数の統計的検討 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [25] (1) 堺伸也 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 中間解析における対象集団の再評価デザインの研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [26] (1) 寺尾工 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 皮疹の治癒過程を考慮した治癒日数推定の効率化に関する研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [27] (1) 竹ノ内一雅 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 関節リウマチ臨床試験に即した脱落を考慮した解析法の研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [28] (1) 長谷文雄 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 計量的予後因子を取り入れた最小化割付法の研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [29] (1) 長谷川要 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 血液学的検査における経時測定データの要約指標に関する研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [30] (1) 萩野篤司 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) がんの臨床試験における症例割付方法の性能比較 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [31] (1) 北条誠一郎 (2) 修士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) HCV動態の数学モデルに基づく測定時点設計に関する研究 (5) 指導教員 吉村功, 浜田知久馬
- [32] (1) WJPSP Wijyayitunga (2) 修士 (理学) (3) 東京工業大学 (4) Graphical model selection (5) 主査 間瀬茂
- [33] (1) 中村将典 (2) 修士 (理学) (3) 東京工業大学 (4) ペイジアンネットワークとその経営分析への応用 (5) 主査 間瀬茂
- [34] (1) 戸辺玲子 (2) 修士 (経済学) (3) 一橋大学 (4) 2ファクターのMSプリペイドモデル (5) 主査 高橋一
- [35] (1) 増成敬三 (2) 修士 (経済学) (3) 早稲田大学 (4) 空間統計学による地価の推計 (5) 主査 西郷浩
- [36] (1) 三村健太郎 (2) 修士 (理学) (3) 慶應義塾大学 (4) On Four-level orthogonal arrays with strength t , constraints $t+1$ and index unity (5) 主査 神保雅一
- [37] (1) 原瀬晋 (2) 修士 (工学) (3) 慶應義塾大学 (4) Mersenne Twisterの k 次均等分布性の改良 (5) 主査 神保雅一
- [38] (1) 宮村理 (2) 修士 (人間科学) (3) 大阪大学 (4) 調査研究における因果探索法の頑健化 (5) 主査 狩野裕
- [39] (1) 辻貴彦 (2) 修士 (工学) (3) 大阪府立大 (4) 逐次二項抽出における p , $1/p$ の不偏推定 (5) 主査 長尾壽夫
- [40] (1) 田中幹浩 (2) 修士 (工学) (3) 大阪府立大 (4) 多段階推定とその積率 (5) 主査 長尾壽夫
- [41] (1) 堺本哲司 (2) 修士 (総合情報) (3) 岡山理科大学 (4) 非対称に検定の研究 (5) 主

査 山本英二

- [42] (1) 橋本貴之 (2) 修士 (学術) (3) 広島大学 (4) ブロックデザインに関する組合せ論的性質の精緻化 (5) 主査 景山三平
- [43] (1) 田中慎一 (2) 修士 (理学) (3) 広島大学 (4) 層別化逆回帰法 (5) 主査 若木宏文
- [44] (1) 安部友紀 (2) 修士 (理学) (3) 広島大学 (4) 遺伝子発現データの判別解析 (5) 主査 藤越康祝
- [45] (1) 姫野哲人 (2) 修士 (理学) (3) 広島大学 (4) MANOVA Model及び正準判別分析における検定統計量の高次元漸近展開 (5) 主査 藤越康祝
- [46] (1) 葉真寺裕 (2) 修士 (理学) (3) 広島大学 (4) 多変量2値データにおける変数選択とその応用 (5) 主査 藤越康祝
- [47] (1) 原島大樹 (2) 修士 (数理学) (3) 九州大学 (4) Thin plate splinesに基づく非線形回帰モデル (5) 主査 小西貞則

博士論文

- [1] (1) 大谷内奈穂 (2) 博士 (理学) (3) 筑波大学 (4) Information Inequalities for the Bayes Risk of Estimators in Non-Regular Cases (5) 主査 赤平昌文
- [2] (1) 河合伸一 (2) 博士 (理学) (3) 筑波大学 (4) Ratio Estimation and the Approximation of Moments (5) 主査 赤平昌文
- [3] (1) 高岡慎 (2) 博士 (経済学) (3) 東京大学 (4) 季節性と経済時系列分析 (5) 主査 国友直人
- [4] (1) 室井芳史 (2) 博士 (経済学) (3) 東京大学 (4) Pricing Problems and Statistical Analysis of Credit Derivatives and Options (5) 主査 国友直人
- [5] (1) 青木敏 (2) 博士 (情報理工学) (3) 東京大学 (4) Exact methods and Markov chain Monte Carlo methods of conditional inference for contingency tables (5) 主査 竹村彰通
- [6] (1) 田中紀子 (2) 博士 (保健学) (3) 東京

大学 (4) Regional inference procedure using smoothing techniques for case-control association studies (5) 指導教官 大橋靖雄

- [7] (1) 逸見昌之 (2) 博士 (学術) (3) 総合研究大学院大学 (4) Geometry of Estimating Functions and Causal Inference (5) 主査 栗木哲, 指導教官 江口真透
- [8] (1) 佐藤忠彦 (2) 博士 (学術) (3) 総合研究大学院大学 (4) マルコフ切換モデルによる観測されない特別陳列実施の有無の統計的推測法に関する実証研究 (5) 主査 田村義保
- [9] (1) 神山雅子 (2) 博士 (学術) (3) 総合研究大学院大学 (4) Adjustment of Sampling Locations in Rail-Geometry Datasets with Dynamic Programming and Non-Linear Filtering (5) 主査 土谷隆, 指導教官 樋口知之
- [10] (1) 竹之内高志 (2) 博士 (学術) (3) 総合研究大学院大学 (4) Statistical Learning Theory by Boosting Method (5) 主査 中野純司, 指導教官 江口真透
- [11] (1) 武藤幸康 (2) 博士 (理学) (3) 慶應義塾大学 (4) Existence and Construction of array type block designs and their generalization to edge-colored graph decompositions (5) 主査 神保雅一
- [12] (1) 西山智 (2) 博士 (工学) (3) 東京理科大学 (4) 複合最大対比法とその毒性試験データ解析への応用 (5) 指導教員 吉村功, 狩野紀昭
- [13] (1) 松本智恵子 (2) 博士 (理学) (3) 広島大学 (4) An optimal discriminant rule in the class of linear and quadratic discriminant functions for large dimension and samples (5) 主査 若木宏文
- [14] (1) 安道知寛 (2) 博士 (数理学) (3) 九州大学 (4) Nonlinear Regression and Multi-class Classification Based on Radial Basis Function Networks and Model Selection Criteria (5) 主査 小西貞則

[15] (1) 野中美佑 (2) 博士 (数理学) (3) 九州大学 (4) Statistical Modeling based on Regularized Local Likelihood Method (5) 主査 小西貞則

[16] (1) 徳重修一 (2) 博士 (理学) (3) 鹿児島大学 (4) 関数データの非類似性とクラスタリング法に関する研究 (5) 主査 稲田浩一

8 2002・2003年度第4回評議員会議事録

日時：平成15年12月6日(土) 13:30~16:00

場所：統計数理研究所 会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、岩崎学、氏家勝巳、鎌倉稔成、北川源四郎、西郷浩、佐藤学、柴田里程、瀬尾隆、田村義保、道家暎幸、富澤貞男、西井龍映、大戸隆信、樋口知之、広津千尋、福井武弘、藤井光昭、舟岡史雄、牧野都治、南美穂子、宮岡悦良、渡辺美智子、委任状13名

冒頭、会長より、出席者および委任状の総数が定足数に達しており、評議員会が成立したことが宣言された。

報告事項

<議題1>理事会からの報告

国友理事長より、この間の理事会活動の経過説明が行われた。

[広報] 117号を発行した。また会員にとり有用と考えられるニュースはメールやHP上に掲載しているとの報告があった。

[情報] メールリングリストの管理や大会参加や報告希望のWEBによる受付方法の整備を行っているとの報告がなされた。

[会誌] 欧文誌：第2号(欧)の編集・出版を進めている。また、引き続き国際化を進めることが報告された。

和文誌：第3号(和)の編集・出版を進めている。和文誌については来年度、年間2冊発行の方向で検討していることが報告された。

[渉外] 藤越会長が韓国統計学会へ出席し、交流を進めた。これからも、国際化を推進する方針であるが、来年の大会における企画についても交渉

を始める予定である。また、学会ロゴの確定作業を行っていることが説明された。

[連合大会] 前回の大会は好評であったと認識していること、および、来年度大会に向けて実行委員会を花巻で開催したことが報告された。

[その他] 学会誌の図書館を含めた会員外の販売部数が多くないので、これから購読を積極的に勧めていく方針である。また、協力関係にある韓国統計学会の雑誌についても、その購読をお願いしたいとの要請がなされた。

<議題2>2003年学会賞ならびに小川賞会計報告

藤越会長より、配布資料に基づき学会賞および小川賞の会計報告が行われた。

<議題3>研究部会の終了報告と中間報告

藤越会長より資料に基づき「QOL測定尺度校正の研究(丸山久美子主査)」、「電子社会における統計教育のあり方に関する研究(村上征勝主査)」の2件の終了報告と「多重比較とその関連分野の総合的研究(鎌倉稔成主査)」の1件の中間報告が説明された。

<議題4>特別委員会からの報告

統計教育委員会より、「Careers in Statistics」の作成に関する検討を進めていることが報告された。

<議題5>入会者の報告

5名の入会希望者がいることが報告された。

審議事項

<議題1>賞の新設について

まず、藤越会長より賞の検討に関する経緯の説明が行われた。統計教育賞に関して統計教育委員会から新たな提案が理事会に提出されたが、この賞に関しても、これまで提案されている賞の案とともに、今後議論していくという方針である。その際、費用はなるべくかけない方向でいきたいとの意見が述べられた。引き続き、この件に関して審議を行っている学会活動特別委員会の舟岡主査より検討経過の説明があった。特別委員会では、去年の評議員会の議論をうけて、学会が新設する賞のあり方について議論を開始した。論文賞については、小川賞があるので、それと内容的に重ならないようにする方向が考えられる。その為、年齢制限として40歳以上、または、他の論文誌へ論文を掲載した会員を表彰の対象にする事を検討している。また、教育賞の新設についても前向きに検討している。これと同時に、他の研究活動についても賞を設けることができないか否かを検討していきたい。より具体的には、研究・教育の組織を立ち上げたり、シンポジウムを長期間継続した事例、新しい研究分野の確立に貢献した事例、新しい統計調査を立ち上げる貢献、等を対象にした賞、あるいは、本の出版などを対象にした賞も考えられる。今後は、賞を増やす方向で、議論を進めていきたいと考えているとの意見が表明された。

次に評議員からは、賞を増やす方向はよいものの、目的がはっきりしていないものもあり、あいまいなままでは問題が残るといった意見等、いろいろな意見が出された。意見交換の後、学会の賞を増やす方向で進める方向については評議員会で了承した。なお、各賞の詳細については今後その内容をつめていく必要があり、特別委員会で議論される案を理事会で討議していくこととした。教育賞についても他の賞とともに議論し、可能ならば今回の総会で承認を得る方向で議論をまとめていくということになった。

<議題2>会則文章について（入会者の推薦者2名をなくすことについて）

国友理事長から会則の変更に関して、以下のようない文章の案が提示され、経緯の説明があった。

「第7条。統計学に興味を持つものであって、本会に正会員として入会しようとするものは、理事会の承認を得なければならない。」

「第9条。統計学に興味を持つ学生は、理事会の承認を経て本会に学生会員として入会することができる。」

これに対して、評議員からは、原案に関して、特に異論はなく、この案で了承された。

<議題3>会則の変更について（長期会費滞納者について）

国友理事長から会則の変更に関して、具体的な会則の文章案の提示があり、経緯の説明があった。これに対して評議員からは文言の一部に関して、「退会したものとみなすことができる」というほうがいいのではないかと、という意見が出され、これに修正の上、承認された。ただし、除名、退会したとみなす場合については評議員会の審議を経ることとするということが確認された。

<議題4>選挙管理委員の選出について

藤越会長から、次期評議員選挙に関して、加藤剛氏（留任）、山下智志氏（新任）を選挙管理委員として推薦することが提案され、承認された。

<議題5>評議員選挙の時期について

国友理事長より、時期や費用など事務的な理由により次回の評議員選挙を従来より早めることが提案され、了承された。その際、投票率を下げないために、選挙の締め切りは、従来より延ばすことなどを検討することとした。

<議題6>統計関連学会の協調について

藤越会長より、配布資料に基づき、統計関連学会連合について様々な考え方が紹介され、現状認識を述べた。次に学会組織特別委員会の瀬尾氏（垂水主査の代理）より、同連合に関する案を検

討した結果が報告された。特別委員会では議論の中で原案をいくつかの点について修正した案を作成したことが説明された。瀬尾氏の報告については評議員からいくつかの意見が述べられたが、まず「緩い連合」を立ち上げるという修正案（柴田案の修正）を評議員会として了承することが承認された。なお、細かな修正については会長、理事

長に一任するということが認められた。

<議題7>退会者（長期会費滞納者）の承認

退会にいたる経緯が説明され、承認された。この場合、退会したとみなしたという通知をするかどうかについては、今後、検討することとなった。

9 2002・2003年度理事会議事録

2003・2004年度第8回理事会議事録

日時：2003年11月21日（土曜日）12：30～16：00

場所：統計数理研究所特別会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、早川毅、中野純司、赤平昌文、竹村彰道、加納悟、宿久洋、大屋幸輔、倉田博史、瀬尾隆、南美穂子、佐藤整尚

<議題1>会長、理事長、各理事からの報告

〔会長〕藤越会長より、韓国統計学会へ招かれて出席した時の状況が報告された。韓国側からは大変な歓迎をうけたこと、来年はこちらへ来ていただく予定であるので、これからも、より、いっそう国際交流をすすめていきたい、との発言があった。

〔理事長〕国友理事長より、来年予定されている評議員選挙を担当する選挙管理委員について、山下 智志氏（統計数理研究所）、加藤 剛氏（慶応大学）を候補として、評議員会へ推薦したいとの報告があった。

〔情報〕宿久担当理事、中野担当理事より、連合大会の受付について、レンタルサーバーを借りて、連合大会のHPを立ち上げるよう、作業を進めているとの報告があった。当面は連合大会のための運用を考えており、現統計学会HPから、そのまま移行する予定であり、それに伴い、受付システムについては統計学会の手を離れることになるということが説明された。また、そのための人手についてもこれから検討していくことになった。

〔企画〕倉田担当理事より連合大会へ向けたスケ

ジュールの案が説明された。また、今回の連合大会での市民講座は地域経済関連を予定していること、今年から、チュートリアルに関しても公募する予定であることが報告された。今回も、コンベセッションを継続して行いたいこと、ソフトウェア・セッションについては改革していく方向で検討が進んでいるとのことである。

〔和文誌〕加納担当理事より、今年度の和文誌の発刊は少し遅れる予定であること、内容については論文4本が確保されているが、できれば、あと、1-2本を追加したいとの報告があった。現在、審査中の論文が3本あり、これは、来年度の号に入る可能性があること、来年度の企画は現在、調整中であることも報告された。また、来年度、年2回発刊にする場合、欧文、和文を完全に分けることも考えられ、その場合は、ページ番号は別々になり、タイトルも考える必要があることが指摘された。これに関しては引き続き議論していくことになった。

〔会報〕宿久担当理事より、会報117号が出たことが報告された。この際、穴のあけ方について問題があり、原因を調べたところ、印刷会社側の問題であり、今後、このようなことが無いように注意するという説明がなされた。

〔大会〕早川担当理事より、11月20日に実行委員会による現地視察を行った際の状況が報告された。会場までのアクセスや、現地での食堂、プロジェクターに関して若干の問題があり、今後、対応を検討したいとの説明があった。

〔渉外〕赤平担当理事より、2005年度大会につい

て統計学会に対して開催希望校がある旨の報告があった。2005年度大会については他学会と共催で開催する可能性も少なくないので、引き続き理事会及び連絡委員会で議論していくこととした。また、竹村担当理事より、韓国統計学会との交流について報告があった。さらに、科研費については積極的に応募するようにメーリングリスト通じて会員に呼びかけを行ったことが報告された。瀬尾担当理事より、学会のロゴマークについては、年内には候補が完成する予定であること、マークには創立の年号を入れる予定であることが報告された。また、完成した際には、ホームページ、ポスター、封筒、会報、雑誌等にロゴを入れる予定であることが説明された。

〔庶務・会計〕南担当理事より、会員名簿の原案が示された。この案では、賛助会員を見開きの表紙に示すとともに、今回の会則の変更を反映したものとしている。また、投稿規定も改定したものを掲載し、分科会規程も追加したとの報告がなされた。

審議事項

<議題2>会則について

長期会費滞納者に関する会則について原案が示され、これについて、議論を行った。そして、この案を、評議員会に提示することが決まった。

<議題3>統計教育賞について

本賞について提案があったことが説明され、今後、特別委員会で検討してもらおうということになった。

<議題4>入会申し込み用紙の変更について

会則の変更に伴い、入会申し込み用紙の案が提案され、議論が行われ、特に、知り合いの会員名は書かなくても良いことに修正され、承認された。

<議題5>学会誌について

学会誌の現在学会員以外への有償配布数が少ないので、各図書館へとっていただけるよう、お願い

したいという提案がなされ、今後、この方向で活動していくことになった。また、引き続き、韓国統計学会誌の購読も勧めていくことになった。

<議題6>評議員会

今回の評議員会での報告事項、審議事項について説明があり、了承された。

<議題7>和文誌のTeX化

和文誌のTeX化について議論をしたが、まだ、すべて、TeX化するのにはむずかしいのではないかという意見が出され、引き続き、議論していくことになった。

<議題8>大会要旨について

従来、和文誌に大会での報告の要旨を掲載しているが、連合大会への移行に際して、企画委員会からどのようにすべきか意見を求められていることが報告された。本年度については、すべての要旨を掲載予定であるが、来年度に関しては、廃止も含め、今後、検討することになった。

<議題9>評議員選挙

大会のプログラム発送の関係から、今回の評議員選挙の投票用紙送付を4月に行うことが提案され、承認された。

<議題10>学会連合について

統計関連学会の連合について、柴田氏作成案と椿氏作成案が示され、主として椿氏作成案について議論が行われた。

<議題11>入退会者の承認

配布資料が示され、承認された。

<議題12>その他

今回の理事会は1月24日開催の予定であることが発言された。

2002・2003年度第9回理事会議事録

日時：平成16年1月24日（土）12：00～15：30

場所：統計数理研究所 会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、久保川達也、加納悟、柴田里程、倉田博史、早川毅、赤平昌文、竹村彰通、瀬尾 隆、南美穂子、佐藤整尚

<議題1>会長、理事長、各理事からの報告

〔理事長〕国友理事長より、12月に行われた評議員会についての概略が報告された。

〔会長〕藤越会長より、12月に行われた評議員会で、新たに学会が賞を新設する案件について、論文賞など全部で3つの賞を検討することで了承されているとの説明があった。また、韓国との交流は引き続き継続して行っていくつもりであり、できれば、台湾との交流もすすめていきたいとの発言があった。

〔企画〕柴田担当理事より、連合大会のチュートリアルや企画のセッションについて、Web上でも、いろいろな意見をだしてもらうようにするとの報告があった。また、今年は研究報告の受付を期限通りに締め切るとの報告があった。

〔大会〕早川担当理事より、現在、宿泊関係について交渉を進めている。また、保育室については商工会議所に対応をお願いして、保育を担当してくれる団体の紹介をしてもらっているとの報告があった。

〔広報〕宿久・大屋担当理事の代理で、南庶務担当理事より、No.118の会報を発行したこと、ホームページの更新を行ったことが報告された。

〔欧文誌〕久保川担当理事より、No.2の発刊が少し遅れたことが報告された。また、今年度の年間総ページ数は270ページになったこと、去年は全部で32本の投稿があったこと、引き続き、日本人からの投稿が少ないことなどが報告された。現在、2本が受理され、5本については修正を要求しており、それ以外に、13本が査読に入っている段階である。また、バグダットの大学から雑誌の交換の要請があるが、断る方向で交渉するつもりであることが報告された。

〔和文誌〕加納担当理事より、今年度の号は4本の論文、会長講演、学会要旨の構成になる。投稿論文がきちんと投稿規程に準じていないこともあり、発行まで時間がかかっている。また、来年度は7月と1月に発刊予定であることが報告された。

〔渉外〕瀬尾担当理事より、ロゴマークの案を完成したことが報告され、図案が披露された。これに対して、特に日本語に関しては、もう少し、重厚な感じのフォントのほうがいいかもしれないとの意見が出され、検討することになった。また、原案が採用された方には賞金を送るとともに、会報で紹介することが報告された。

〔庶務〕南担当理事より、会員名簿が発刊されたことが報告された。また、学生会員の継続について、学生の身分を確認する方法を考えたほうがよいとの意見が出され、今後の理事会で検討していくことになった。

<議題2>和文誌のTex化について

見積もりを取って検討したが、費用の面ではあまりかわらないとの報告があり、すぐに進める必要はないが、長期的に検討していくことになった。

<議題3>和文誌における大会講演要旨の扱いについて

加納担当理事より、本年度はすべての報告を掲載していくつもりであるが、今後どうするかについては依然問題である。また、相当な分量になっている、との報告があった。また、タイトルと発表者だけを載せる案も出た。今後、企画委員会とも相談し、幅広い層の意見を聞きながら、早急に結論を出すことになった。

<議題4>和文誌と会報の発刊回数とその予定について

佐藤庶務理事より、和文誌を年2回にすること、および、これに関連して会報の発刊回数をどうするかについて、コスト面についての説明があった。当面はコストが増えてしまうが、多少のコスト削

減の工夫をすることで、現状の発刊回数を維持することが了承された。また、和文誌の名称と号番号のつけ方については今後、検討していくことになった。

<議題5>事務局の体制について

南担当理事より、事務局スタッフの引継ぎ問題や事務局運営の改善に取り組んでいることが報告され、了承された。

<議題6>入会者退会者の承認

入会退会者に関して資料が提示され、承認された。

<議題7>その他

今回の理事会は3月13日に開催する予定であることが表明された。

10 事務局から

統計関連学会連合大会の案内

2004年度統計関連学会連合大会(9月3日～6日、富士大学)に関する最新情報は
<http://www.aiss.gr.jp/2004/index.html>
を参照下さい。随時更新されています。

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊の紹介なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内(教員公募)なども受け付けております。

できるだけe-mailによる投稿。もしくは、文書ファイル(テキスト形式)の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒890-0065 鹿児島市郡元1-21-35

鹿児島大学理学部 宿久 洋 宛

Tel: 099-285-8040 (ダイヤルイン)

Fax: 099-285-8051

E-mail: kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

までであるということがないように事務手続きを以下のように変更します。学生会員として入会を希望される方には予め卒業・修了予定年月をお知らせいただきます(入会申込書を変更いたしました)。その後進学・予定変更のご連絡がない場合はその予定年月終了時に正会員に変更させていただきます。ただし、昨今の就職事情を鑑み、個別の事情には対応いたしますので、その旨事務局までご連絡下さい。

2004年3月時点で学生会員であった皆様には、学生会員の継続を希望される場合は、卒業・修了予定年月をお知らせいただくよう、メールあるいは郵便ですすでご連絡いたしました。卒業・修了予定年月のご連絡がなかった方は正会員に変更させていただきましたのでご了承下さい。

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9

大和ビル内財団法人統計情報研究開発センター
日本統計学会係

TEL: 03-5467-0481, FAX: 03-5467-0482

E-mail: jstatoc@sinfonica.or.jp

学生会員の事務手続き変更のお知らせ

学生でなくなったにもかかわらず学生会員のま

退会者

内田 裕之、石川 武司、高島 忠、中井 達、

定道 宏, 横山 和典, 井上 俊昭, 坪田 邦宏,
金 丙文, 石井 敏統, 二宮 理恵, 高山 啓,
大西 治男, 大竹 正徳, 小山 弘彦, 小宮 不
二人, 守岡 隆, 九州電力(株) (賛助会員), みず
ほ総合研究所 (賛助会員)

現在の会員数 (2004年4月1日現在)

名誉会員	22名
正会員	1347名
学生会員	170名
総計	1539名
賛助会員	17法人
団体会員	4 団体

・統計関連学会ホームページURL:

<http://www.jss.gr.jp>

・住所変更連絡用e-mailアドレス:

jusho@jss.gr.jp

・広報連絡用e-mailアドレス:

kaiho@jss.gr.jp

・その他連絡用e-mailアドレス:

jjmu@jss.gr.jp